**［認知症サポーター養成講座寸劇シナリオ］**

**事例１：夕方になると家を出て行こうとする**

（おじいちゃん、勉強しているあきちゃんが横に並んで座っているお嫁さんがテレビを見ている）

お嫁さん：あら～島倉千代子さんが亡くなったんだって。昭和を代表する演歌歌手でしたよね、おじいちゃん。人生いろいろはおじいちゃんの十八番ですよね。

おじいちゃん：人生いろいろ・・・・・・・・（さびを歌いきる）

お嫁さん：やだ、もう4時だわ。そろそろ夕飯の用意しなくちゃ。おじいちゃん、そのままテレビを見て待っていてね。

おじいちゃん：（しばらくすると何かソワソワ動き出して、ふろしき包みを背負って出ていこうとする）

そろそろ暗くなってきたから家に帰るよ。おじゃましました。

おじいちゃん：（外に出ようとする）

お嫁さん：おじいちゃん、どこへ行くの？ここがおじいちゃんの家でしょう。

おじいちゃん：いいえ、私の家はここではありませんよ。○○に帰ります。

お嫁さん：この家に何年もいるじゃないの。

おじいちゃん：帰ります。

お嫁さん：もう何言ってるんですか？ここはおじいちゃんの家ですよ。この家はおじいちゃんが、亡くなったおばあちゃんと一生懸命働いて立てた家じゃないですか？

おじいちゃん：そんな訳ないだろう。何を言ってるんだい。帰らせてもらうよ。

お嫁さん：毎日毎日そう言って、何度も迷子になって、今までは警察に無事保護されたから

いいようなものの・・・・・恥ずかしいったらないわよ。

おじいちゃん：とにかく帰るよ。

お嫁さん：どうせ帰れないくせに・・・・ここにいてちょうだい！

おじいちゃん：私を家に帰さない気か！

お嫁さん：おじいちゃんの家はここでしょう。毎日毎日、同じことばかり言わせて、全く・・・

**【解説】**これは帰宅願望といい、俗に夕暮れ症候群などとも呼ばれています。暗くなったり何もすることがなかったり不安になると出現する症状です。人間は、止められれば止められるほど願望は募るものです。ですのでこの帰宅願望をかなえてあげなければ、より願望は強くなり不安や混乱を招き、「徘徊」と呼ばれる行動につながってしまうのです。その一刻の希望や思いをかなえてあげてください。

では、こういったときにはどのように対応したらよいのでしょうか？続きをご覧ください。

おじいちゃん：そろそろ暗くなってきたから家に帰るわ。

おじいちゃん：（外に出ようとする。）

お嫁さん：おじいちゃん、どこへ行くの？ここがおじいちゃんの家でしょう。

おじいちゃん：いいえ、私の家ではここではありません。○○にかえります。

お嫁さん：そうですか。でもここからだと少し遠いのでタクシーで帰りましょう。

今タクシーを呼びますね。

お嫁さん：（電話を掛けた振りをする）

お嫁さん：あっ、もしもしタクシーですか?今から○○に行きたいのですが車を一台お願いします。

　　　　　（少し間をおき）あっ、そうですか。今出払っているんですか。

　　　　　 えっ？一時間位かかるんですね。はい、はい。

　　　　　 じゃあお願いします。

お嫁さん：（電話を切る）

お嫁さん：おじいちゃん、今タクシーが混んでいて、来るまでに一時間位かかるんですって・・・・。

　　　　　 待っている間、散歩でもしましょうか。

（お嫁さん、おじいちゃんとしばらく外を歩く）

おじいちゃん：あぁ、真っ暗になったな。お～寒い、寒い。

お嫁さん：じゃ今日はここに泊まりませんか？家に帰るのは明日にしましょうよ。

おじいちゃん：そうさせてもらうとありがたいけど、なんか申し訳ないな・・・・。

お嫁さん：遠慮しないでよ、おじいちゃん。夕食も作りすぎてしまったんで、食べてもらえると助かるわ。

おじいちゃん：そうかい？じゃそうさせてもらおうかな。

**【解説】**いかがでしたか？この症状には理由や目的があります。例えば認知症が進行し、自分の青年時代の記憶の中で生活している方ですと、自分の生まれ育った家で、「早く帰って、両親の農業の手伝いをしなければ」ということがあります。そういった場合は、「農業の仕事も段取りがついて全て終わり、両親ともにゆっくりしていますよ。」と、その理由を取り除いてあげ安心させてあげることが大切です。

**［認知症サポーター養成講座寸劇シナリオ］**

**事例２：ごはんを食べていないと言い出す**

（お嫁さんは台所で洗い物をしている）

おじいちゃん：ああ、おいしかった。あきこさんの手料理はいつもおいしいね。ついつい食べ過ぎてお腹いっぱいだよ。

お嫁さん：よかったわ。ほめてもらえると作りがいがあるわ。

おじいちゃん：どれどれ部屋で少し昼寝でもしてこようかね。

（おじいちゃん、立ち上がり出て行き、寝る。）

（お嫁さん、洗い物を続ける）

（しばらくして、おじいちゃんが出てくる。）

おじいちゃん：あきこさん、お昼ごはんはまだかね？

お嫁さん：あら、今食べたばかりじゃないの。お腹いっぱい食べたでしょう？忘れたの？

おじいちゃん：いや、食べていない。

お嫁さん：食べたわよ。おじいちゃんもさっきお腹いっぱい食べたって言ったじゃない。

おじいちゃん：いいや食べていない。昼飯を食べさせない気か？

　　　　　飢え死にさせようとしているのか？

　　　　　食べたなんて嘘ばかりついて！なんて嫁なんだ！

お嫁さん：本当に嫌になってしまうわ。食べたか食べていないか覚えていないんだから。

おじいちゃん：なんだと！飯も食べさせないひどい嫁だ！

お嫁さん：今食べたばかりなのに、いつもこうなんだから。

おじいちゃん：もういい！自分でつくる！

お嫁さん：今食べたばかりでしょう！

おじいちゃん：食べていない！

お嫁さん：食べたでしょう！

おじいちゃん：食べていない！

お嫁さん：もういやになってしまう。

**【解説】**これは認知症の代表的な症状の一つです。記憶障害のために覚えることができない、忘れてしまうのです。最近の事から忘れていきます。誰でも昨日の夕食に何を食べたかを思い出せないことはよくありますが、夕食を食べたこと自体は覚えています。認知症の場合は、「体験の喪失」といって、食べたこと自体を忘れてしまうのです。誰でも体験していないことを「した」と言われれば相手が嘘をついていると思ってしまいます。そしてそれを繰り返し言われれば、劇のように「悪い嫁」になってしまうのです。では、このお昼ごはんを食べたことを忘れてしまったおじいちゃんにどのように対応したらよいのでしょうか？続きをご覧ください。

（おじいちゃん出てくる）

おじいちゃん：あきこさん、お昼ごはんはまだかね？

お嫁さん：あら、さっき食べなかったかしら？

おじいちゃん：食べてないなぁ。

お嫁さん：そうでしたか。私ったらうっかりしていたわ。

今から急いで作るわね。出来るまで少し時間がかかるから、おじいちゃんお茶でも

飲んで待っててね。

何かお茶菓子でも食べますか？おせんべい？

おじいちゃん：いや、お茶だけでいいよ。

（お嫁さん、お茶を注ぐ。）

（おじいちゃん、お茶を飲む。）

おじいちゃん：あ～おいしかったよ。

お嫁さん：じゃあ、おじいちゃん、ご飯の支度が出来たら呼ぶからね。

おじいちゃん：そうかい。いつもすまないね～。じゃあ部屋でちょっと寝てるよ。（出て行き寝る。）

**【解説】**忘れてしまう、覚えることができない認知症の方に、「さっき食べたでしょう」と言っても、思い出すことも理解することもできないのです。本人の訴えを介護者（家族）は素直に聞き入れ、受け入れることが大切です。介護者（家族）が感情的にならずに接することで認知症の方も感情的にならずに落ち着いた気持ちになることができます。

**［認知症サポーター養成講座寸劇シナリオ］**

**事例３：財布が盗まれたと言い出す**

おじいちゃん：お～い。お～い。あきこさ～ん。

お嫁さん：な～に？おじいちゃん。

おじいちゃん：おれの財布がないんだよ。ここに入れておいたはずなのに。

　　　　　あきこさん、知らないかい？

お嫁さん：私は知らないけど、本当にここに入れたの？

どこかに置いたんじゃないの？よく探したら。

おじいちゃん：私はちゃんと入れておいた。あきこさんが盗ったんだろう？

　　　　　泥棒はよせ！いつもいろんなものが無くなる。私のお財布返しなさい！

お嫁さん：そんな訳ないでしょう！おじいちゃん、ないとか言っておきながらいつも自分の

勘違いで後で出てくるでしょう。

　　　　　いつもいつもいい加減にしてください。こっちは忙しいんだから。

（お嫁さん、相手にしないで行こうとする。）

おじいちゃん：（おじいちゃんは、嫁のエプロンを引っ張って）待て、返せ！

お嫁さん：私は知りませんよ！

おじいちゃん：返せ！この泥棒め！

お嫁さん：まったく、いい加減にしてください。

**【解説】**これは典型的な物盗られ妄想といい、比較的認知症の初期の頃から出現します。自分で大切な物を大事にしまいこんだことやしまった場所をすっかり忘れてしまうのです。誰しも自分の大切な物がなければ誰かに盗られたと疑います。この症状は他人ではなく、家族など認知症の方ご本人にとって身近な方に対して多く出現します。特に日頃から同居している方が対象になりやすい行動です。ではこういうときにはどのように対応すれば良いのでしょうか？続きをご覧ください。

おじいちゃん：私の財布がないんだよ～。ここに入れておいたはずなのに。

　　　　　 あきこさん、知らないかい。

お嫁さん：ええっ！本当？どんなお財布？

おじいちゃん：このくらいの赤い色のだよ。あきこさんは知らないのか？

お嫁さん：どこへ行ったのかしら？ちょっと一緒に探してみましょうよ。

おじいちゃん：そうだね～。

（お嫁さん、おじいちゃんで探し始める）

（お嫁さん、財布を見つけるがおじいちゃんに見つからないようにわかりやすい場所に置く。）

お嫁さん：ないわね～。私はこっちを探すから、おじいちゃんはこのあたりを探してみて。

（お嫁さんは、財布を置いた場所を指さす。）

（おじいちゃんは、指さしされた場所を探し始め財布を見つける。）

おじいちゃん：あった！あったよ。こんなところにしまい込んだんだね。うっかりしていたよ。

悪かったね～あきこさん。

お嫁さん：私もよくありますよ。良かったですね。

おじいちゃん：じゃ何か甘いものでも買ってこようかね！

**【解説】**いかがでしたか？忘れてしまう、覚えることができない、またそのために不安な気持ちを抱えている・・・そういう状況の中、正しく判断することができなくなっています。認知症のご本人といくら言い合っても、ご本人にとっては周囲の人がどんどん悪い人になってしまい、結果、物盗られ妄想がますます悪化します。認知症の人を私たちの世界に合わせるのではなく、私たちが認知症の方々の世界に溶け込むことがとても重要なのです。先ほどの対応のように、本人のいうことを認め、そして本人自身が見つけ出せるように工夫するといいでしょう。あなたが見つけて、なくなったものを出してしまっては、あなたが盗ってしまったと考えてしまうのです。ぜひ、認知症の本人と一緒に探し、ご本人が見つ出せるように工夫してください。犯人にされ、泥棒扱いされる家族はとてもつらいのですが、これも認知症という病気がなせるワザなのです。

※寸劇の準備品

おじいちゃん：かつら、地味な上着、風呂敷、湯飲み、財布

お嫁さん：エプロン